世界の終わりと“Boys, be ambitious！”

北海道大学医師会
東栄内科クリニック
武藏（むさし）　学（まなぶ）

後期高齢者となって、若い頃を思い出すことが多くなった。一浪後に大学入学した1969年、授業料は昨今とは雲泥の差の年額１万２千円、入寮した恵迪寮は二食付きで月額５千円余りという安さであり、妹の私立大学入学と重なったので父は大いに喜んだ。現在の授業料であれば、私か妹のどちらかの大学進学は困難であったろう。現在、日本の公的支出に占める教育費の割合は８％で、OECDに加盟する36か国中34位である（2022年）が、あの頃、国は教育予算を十分にとってくれていたのである。知人の全くいない札幌での孤独で貧しい学生生活であったが、「高度経済成長」のためか明日に希望が持てるように感じられる社会であった。しかし一方でベトナム戦争が続き、アメリカ軍の兵站基地となった日本における大学､学生生活の意義が厳しく問われた。大学紛争が燃え盛る中、自己の生き方が常に問われる「針の筵」のような居心地の悪い学生生活であった。なんとか卒業し、国家試験にもパスして臨床医となり、数え切れない失敗はあったものの先輩の指導・サポートのおかげでなんとか血液内科医／健診医として歩んでこれた。特に２年間のアメリカ留学は「燃え尽き症候群」直前だった私を立ち直らせ、家族の絆を強くしてくれた。機会を与えていただいた当時の教授はじめ関係者に深く感謝している。

さて、世は無常と言うが、まさか世界平和を維持するための国連安全保障理事会常任理事国であるロシアがウクライナを侵略するとは夢想すらしなかった。国連憲章の改正がない限り常任理事国は恒久的に継続されるというので、今後も同様の事態が生じないかと心配になる。イスラエルのガザ攻撃にも言葉を失う。第二次世界大戦後の国際秩序は崩壊し、強者が弱者を力ずくで従わせようとした20世紀前半に戻ったように感じてしまう。息子夫婦や孫の将来が心配でならないが、そこでチェコのことに思いが至った。

「人間の顔をした社会主義」を目指して政治経済的自由と民主化を謳歌するチェコスロバキアの「プラハの春」は1968年の夏突然にソ連指導のワルシャワ条約機構軍によって蹂躙された。抵抗する市民百数十名が犠牲となり、ドプチェク第一書記はモスクワに連行されて共産党傀儡政権が樹立された。自由化・民主化に賛同した「二千語宣言」の署名者は、傀儡政権からその撤回と政権への忠誠を強く求められた。多くは妥協したが、失職と監視や嫌がらせを代償に署名撤回を拒否し続けた者もいた。1964年の東京オリンピック女子体操個人総合金メダリストのベラ・チャスラフスカ､ビートルズの「ヘイ・ジュード」を「プラハの春」以前の不自由な市民生活と「プラハの春」弾圧への抗議に置き換えて歌ったマルタ・クビショバ、政権批判の新聞を発行し続けて何回も逮捕された劇作家のヴァーツラフ・ハヴェル等である。彼らは体制批判を根気よく続け、ソ連のペレストロイカの流れのなかで1989年11月に無血で共産党傀儡政権を打倒する「ビロード革命」を達成した。連邦議会議長にドプチェク、大統領に反体制派リーダーのハヴェルが選ばれた。この大国ソ連による小国チェコスロバキアの蹂躙と長年の抵抗による解放の歴史は、ウクライナ国民のみならず我々にも大きな励ましとなるだろう。

話を日本に戻そう。明治維新の激動の中で札幌農学校はウィリアム・Ｓ・クラークを教頭に招き、貧しい徳川家臣の子弟等を学生として開学した。クラークと学生たちの交流の様子は農学校１期生の大島正健による『クラーク先生とその弟子たち』（教文館）に詳しいが、彼が札幌を離れる際に送ってきた学生たちに残した言葉、“Boys, be ambitious！”は「少年よ、大志を抱け！」と訳されて人口に膾炙している。しかし、この訳は私にはピンとこない。校則を“Be gentleman！”のみとしたクラークの教育は武士道に通ずると共に、封建社会を生きてきた学生たちにとって、あまりに自由かつ豊かなものであっただろう。「紳士たれ」のみを校則として掲げたクラークが別れ際に「大志を抱け」などと本当に言ったのだろうか？　例え言ったのだとしても、その「大志」は金、権力、地位や名誉を求める大志では決してなかった、と思う。彼の教えに従う学生たちに、実社会で出くわすだろう困難や苦難にもへこたれないで紳士で在り続けよ！と言いたかったのではないだろうか？　彼の故国アメリカも大きく変容し､国際秩序が崩れつつある現在、“Boys, be ambitious！”は、私たちにもめげず、へこたれずに紳士であり続けよ、と語りかけているように思えてならない。